

ローマ書連続講話 第4回

ローマ書第9章～11章

2011年1月16日（東京 新宿）

奥田 昌道

ありありと生きている霊なるキリスト 何をなさろうと神は義しい 同胞が救われてほしい

ローマ書第9章 ローマ書第10章 ローマ書第11章 パウロの世界観

●ありありと生きている霊なるキリスト

讃美歌「いつくしみ深き友なるイエスは」の、「友なるイエス」という方は讃美歌の中で姿が描かれていますけれども、今は、キリストは見えないお方として、霊なるキリストですね。霊なるキリストで、ありありと生きていてくださる。姿は見えない。本当に身近にいてくださる。キリストはヨハネ伝の中で、

「神様は霊のご存在だから、礼拝する者も霊と真をもつて
つまり全人格的にという、
全人格的にそのお方を拝せよ」

と言われる。

「神は霊なれば、拝する者も霊と真をもって拝せよ」

と。そのキリストご自身がそういう「霊なるお方」なんです、今は。生きていらっしゃる時は、肉体をもっておられた。肉体の中にいわば霊なるイエス、霊なるキリストという方が隠れていたけれども、今は、露^{あらわ}な状態で霊なるキリストとして今、実在していただく。そして、どこにでも来てくださる。呼べば、すぐに来てくださる。呼ぶ前からもうそばにくつついて居てくださる。そういうお方なんです。

またヨハネ伝のキリストの言葉に、

「人を生かすものは霊であって、肉ではない」

とあります。「肉」というのは、生まれながらの人間に備わっているいろんなものです。これは人間のこの世の命が終りを迎えますと、それも無くなつていきます。けれども、「霊」という人間の存在、これは神様と同質なんです。だから、消えないんですよ。そして、その霊も、闇に向かう霊もあれば、光へ向かう霊もある。その霊の姿が、神・キリストと同じ姿で私たちがあるように、キリストは護り導いてくださっている。

「光の子となれ」

という言葉も出てきます。光が来たのに、人は光が嫌で、闇のほうへと背を向けて行った。



光に背を向けた。それが審きになってしまうんだということも仰っていました。そういうふうには、神の霊が、そしてキリストご自身が、

「人を生かすものは霊であって、肉ではない。肉は役に立たない。私が語った言葉は霊であり生命である」

と言っておられる。即ち、キリストの語られた一つ一つの御言、「大丈夫だよ」ということは、その「大丈夫だよ」という御言の中に、キリストがいらっしゃるんです。

「大丈夫だよ、安心しなさい。おそれるな」

と言われたら、そのお言葉の中にキリストご自身がもう内住してくださっている。それをしっかりと受けとりますと、そういう言葉と共にキリストが私たちの中に宿ってください。

仏教のほうで——親鸞さんでしたか——島流しになる時に、お弟子さんが別れを惜しんだ。その時に、

「私を恋しいと思うなら、南無阿弥陀仏という六文字を称えなさい。その南無阿弥陀仏の文字の中に私は居るんだ」

と。つまり、その「南無阿弥陀仏」という言葉は、霊であり生命であって、その中に親鸞自身が生きているから、その言葉を称えなさいということを行った。だから、キリストが、

「私が語った言葉は霊であり生命である」

と言われたとき、私たちはキリストをどこに探すのか。私たちは聖書を開く。聖書を通して、キリストにまみえる。それは、キリストのお言葉を通して、キリストというご人格に触れる。頭で想像していたら、キリストはどこかへ雲散霧消するかもしれません。けれども、この福音書の中に語られている、

「私はお前を愛しているよ、私はお前のために命を捨てる。私は甦って必ずお前たちの所へやって来るよ」

とか、そういう、四つの福音書に散りばめられていますキリストの言葉の中に霊なるキリストがいてくださる。だから、その言葉をムシヤムシヤ食べますと、そのときはキリストが内住してくださる。そんなふうに、皆さん、受けとっていただきたい。私はそう受けとっています。だから、さきほど読みました詩篇23篇の、

「主は私の牧者であって、私には乏しいことがない」

という、あの「主」は、あの頃は旧約の神様なんですけれども、私たちは、「主は私の牧者」というのはイエス・キリスト、そのお方をそのまま受けとります。

「たとえ死の陰の谷を歩むとも禍を恐れじ。汝われと共にいませばなり」

と。いつも一緒にいてくださる。そして護ってください。そう思うんですね。

そして、さきほど歌っていただいた讃美歌512番、

「わがたましいの したいまつる イエス君のうるわしきよ。

あしたの星か、谷のゆりか、 なになぞらえてうたわん。



なやめるときの わがなぐさめ、さびしき日のわがとも、
きみは谷のゆり、あしたのほし、うつし世にたぐいもなし。」

これは自分たちの心の中で主イエスさまに向かつて、

「まことにあなたはその通りの方でいらつしやます」

と、恋人に語りかけるように私たちは言う。祈りというのが語りかけなんです。主様との対話なんですよ、祈りというのは。讃美歌312番に、

「いつくしみ深き 友なるイエスは、罪とが憂いを とり去りたもう。

こころの嘆きを 包まず述べて、などかは下ろさぬ、負える重荷を」

とありましたね。だから、友なんです。煙たい存在ではないですよ。

「こんなことを言ったら、いけないかな」

なんて、心配いらん。

「何でも言つてらつしやい。何でも心の中をそのまま打ち明けてごらん。そしたら、しつかり受けとつて、返つてくるのは励ましの言葉だけ、慰めの言葉だけだよ。

大丈夫だ」

と。いつもそうなんです、大丈夫だと。

キリストの前に、すがりついた人がいますね。ツロ・シドンの女性だとか、その他いろんな問題をかかえてどうにもならない人は必死にキリストにすがった。そしたら、「それでもいいんだ」と。

「あなたの信仰があなたを救った」

とあるけれども、これは堅苦しい。「あなたの信仰」と言われると、「私に信仰があるでしやうか？」となる。そうじゃない。あの必死になつてしがみついている姿、それでいいんだと。

「私はそれを百倍にして受けとつて、あなたに百倍にして報いるから大丈夫だよ」

と。キリストというのはそういうお方なんです。

ですから、学者はイエスさまのことをどう分析しているか知りませんが、私にとつては、このイエス・キリストというお方はそういうお方なんです。この讃美歌512番の2節、

「身のわずらいも世の憂いも、われとともにわかちつつ、

いざなうものの深きたくみ破りたもうれしきよ。

ひとは棄つれどきみはすてず、みめぐみはいやまさらん。」

と。「人は棄つれどきみはすてず」とあります。万人があいそをつかしたり、自分から去つて行つたとしても、あるいは周りの人が次々に去つて行つて自分一人が残つてしまったとしても、それでもあなたの「み恵みはいやまさらん」と。「身のわずらいも、世のうれいも、われとともにわかちつつ」と。キリストがすべてを知っていてくださる。苦しみも悲しみも痛みも全部、わかちつつあつてくださる。

「喜ぶ者と共に喜び、泣く者と共に泣け」



と、これはローマ書12章に出てきますけれども、キリストはもう本当にそれ以上の方です。

●何をなさろうと神は義しい

今日のローマ書9章から11章は大変な所なんです。普通、教会では、この9章から11章のお話はあまり出てこない所ではないかと思えます。もつと言うと、敬遠しているのではないかと。この問題に触れるのいやだという箇所かもしれません。中身も難しい。旧約の引用がふんだんに出てくる。つまり勝手な見解を言っているのではなく、ちゃんと根拠がある。その根拠を示すのに、パウロがこんなにもふんだんにあちらこちらを引用している箇所は少ないと思われるくらいに、たくさん出てくる。

それにしても、ここの所はとても分かりにくい所です。分かりにくいどころか、これをお読みになると腹が立つような所があるんですよ。たとえば、ヤコブとエサウですね。リベカのお腹に双子が宿って、善も悪もなさない時に、神様は

「私はヤコブを愛し、エサウを憎む」

なんてことを言う。フランススコ訳のその解説をみると、

「この憎むというのは誇張した表現で、より少なく愛するという趣旨だ」

と書いてある。

「ヤコブを愛し、エサウをより少なく愛した」

という。このフランススコ会はカトリック系ですから、非常にそれを弁護するように解釈しているけれども。どの聖書を見ても、

「私はヤコブを愛し、エサウを憎んだ」

とはつきり書いてある。そんなのを見ると、

「なんだ、神様というのは身勝手な神様だな」

というふうに普通、思いますよ。

それからまた、エジプトのパロのことが出てきます。モーセがいろんなことを言っていて、イスラエルの民を脱出させようとしています。ところが、パロはいろんな災いのあとで、

「わかった、わかった。悔い改めるよ」

と言いながらも、三日たつと

「こんちくしょう、絶対に悔い改めるもんか」

とまた心をかたくなにする。それが繰り返されて最後にはパロの一人息子が疫病にかかって死ぬ。それでやっと、イスラエルの民を奴隷状態から解放して、彼らは出掛けて行く。その時にまた、心をかたくなにして、パロの戦車が追いかけて行って、絶体絶命の所に紅海が二つに割れて、そこへイスラエルの民が進んで行く。渡り切った所で波がもう一度もとに戻って、追いかけて来た戦車がすべて滅んでしまったというお話が出エジプトの所にでてきます。あのパロについても、何と書いてあるか。神様はパロをかたくなにして、そ



してそれに自分の力を誇示して、そして

「わが栄光のためである」

と言う。

「そんな身勝手な神様があるものかね」

というのが我々の常識的判断ですね。それに対して、パウロは何と言うか。

「造物主にゴチャゴチャ言うんじゃない。頑なな心にしておきながら、それを罰するとは何と身勝手な神様かと言って、普通なら腹を立てるだろう。しかしとんでもない。創り主に対して創られた者は文句を言う資格はない」

なんて言う。そして、陶器師が粘土からいろんな器を作る。いろんな器に作る権限がある、自由がある。つまり器に作られたと言って文句を言うか、そうではないだろうか。それから、エレミヤのところでは、作りそこなったら、つぶしてしまつて、もういつペン作り直す。そういうこともやる。要するに、そういう全体を通して言われていることは、「神様の独占活動」という——これはルターの言葉です——つまり、オールマイティであつて、

「何をなさろうと神は義しいんだ」

という、これをしっかり受けとれというのがパウロの言い方なんです。人間の頭でゴチャゴチャ考えるなど。人間の善悪の判断で神様なんてとらえきれない。ただただ

「はい、ご無理ごもつともでございます」

というふうに、もう人間の判断を越えたところに神様の摂理というものがある。これに人間が頭をたれて、

「もうわからないけれども、あなたは決して変なことをなさるお方ではありませんと、はつきりどんな時にも従い切るといふ姿、これが大事だ」

ということをパウロは言いたい。これは普通の人間はできない。パウロはある所では、

「神様というのは非常に公平なお方である」

と、2章か何かに出てきましたね。律法があろうとなかろうと、信仰があろうとなかろうと、その人の姿が神の御意にかなう姿だったら、それは神様のところへ行ける。上辺が、信仰があるとか、あるいは律法をいただいているとか、神の民であるとか、そんな上辺がどうであろうと、その人の本質が神様の御意にそわないような姿の者は全部だめで、

「神は偏り見給うことはない」

と。私の大好きな所です。第2章の所に出てきてましたでしょ。そういうように、

「神様は偏り見給うことのない公平なお方である」

と、一方で宣言しておきながら、この9章の所にきますと、まことに暴君のような神様が描かれている。これは躓きの石だと思います。

けれども、ただ一人躓かなかったお方がいらつしやる。イエス・キリストです。あんな素晴らしいキリストがなぜ十字架にかなければならないのか。なぜゲッセマネであれ



ほど苦しまなければならないのか。全くわからないでしょ。

「自分のことに自分が責任をもつ」

という、これは我々の感覚でわかる。悪い事をしたら罰がくる。善い事をしたら、神様に喜ばれて素晴らしい所へ行ける。神様はいいやつを重んじてくださり祝福し、悪いやつには罰を下す。そのぐらいのことは我々はわかるわけです。それが全然なかったら、この世の中は正義も何もあつたものではない。もしこの世の中に刑罰がなくて、何をしようと自由勝手に、被害者は泣き寝入り。それでいいということになったら、この世の中はもたないですね。ちゃんと秩序があり、義というもの、正義というものがあつて、それに対応するような社会制度となつていてこそ人間は納得できるわけです。ところが、イエス・キリストの運命たるや、あんな素晴らしい方がこともあろうに十字架にかかり、「なんでやねん」ということです。私はいつも言うんです、十字架というのがどんなに大変なことかというのを自分がその身になつて考えたら。

パウロも言ってますよね、5章に出てくる。

「情け深い人のためなら、私は犠牲になろうかというぐらいの気持ちも起こるかもしれない。でも、正しい人は煙たい、そんなやつのために何も私は死ぬことはない。情け深い人に対しては、私は一肌脱ごうか、時には犠牲になろうかというぐらいの気持ちはあるだろう。ところが、キリストは神に逆らう者、いや自分に対してののしり、唾をし、鞭打ち、そういう敵対者のために命を棄てたもうた。しかも、そこに神の愛が現れた」

と、こう書いてある。これはもう全く我々の常識を、普通の善悪の判断を越えた世界です。パウロはコリント書では、

「そういう十字架というものが救いである」

と言う。まことにこれは愚かな話だと普通は思う。これは口伝えですけども、瀬戸内寂聴さんという非常にもてはやされている人ですけども、その人がある時、話の中で、

「イエス・キリストは、あの死に方がなかったら、もうちょつとイエス・キリスト

もいいんやけど。あの無惨な死に方では、イエス・キリストなんてね……」

と、そういうことを言つてたと言うんですよ。僕はその話を聞いて、

「バカッター！ 何も知らないで大きな口たたくな」

と、そういうふうな義憤を感じたんですけれども。世間の人はその程度の認識かもしれない。日本の智者といえどもですよ。本当に十字架というものが何であるかということがわかつたら、ただではおれない。それはもう、

「申し訳ありません。そこまでのことをお考えくださつて、そこまでのことをしてくださったんですか。全く我々の普通の人間の判断を超えたことを、主よ、あなたはなさつてくださいました。そこまでして、私たちを愛してくださつたんですね」



と。これが私においては、何というかな、本当の砕けというんでしょうか、「魂が砕かれる」とか、ポカッと殻が破れて、そこに光が差し込んでくるというような、その体験ですね。その時は第三者としてイエスという方を歴史的な人物としてしか見てないんですよ。そうじゃなくて、一対一なんです。本当に一対一で向き合っている。その方が、

「私はお前のために死ぬんだよ。お前は大丈夫だ。お前に生命を与える。私のうちに溢れていた生命がお前の中に流れ込む。妨げていたものは全部、十字架で背負い切った。きれいに終わった。わがこと終りぬ。全部終わった、大丈夫だよ」と仰った。だから、パウロは、

「私は主と共に十字架につけられた。生きているのはもはや私ではない。キリスト、復活されたあのキリスト、御霊のキリストが私の中で生きてくださっている。私もその方と一つになって生きていく。これが私の生きざまだ」と。そのことをガラテヤ書で告白してますね。

やはり、私はキリストという方がいてくださるおかげで、神様のなさっている目茶苦茶と見えることでさえも、深い深い御意から出ているんだということを受けとれる気がするんです。もし、イエス・キリストの十字架がなければ、私は旧約でそんなこのパウロの言う9章なんかにはぶつかつたら、もうさつきとサヨナラしてたかもしれません。もし、これにいきなりぶつけられたらね。そんな思いをしますので、皆さんはどんなふうにお受けとりになったかということで、初めに申し上げたんですが。まあ順を追って前から見ていきましょう。

●同胞が救われてほしい

パウロがどういう立場で9章から11章を書いているかを、まず申し上げます。パウロは、ご承知のように、始めユダヤ教に熱心で、

「^{おきて}律法の義につきては責むべきところなし」

と。そして、イエスという方はいわば律法に対する反逆者——律法に対する反逆者ということとは神に対する反逆者——と捉えたわけです。律法を墨守していたパウロにとって、イエスという方の自由なふるまいは我慢できない。表面的にはバンバン、安息日の律法なんかを破っている。キリストからしたら、それは御意だから破っておられるんですけども、安息日に人を癒したりとか、いろんなことをなさった。いわゆる偽善的なものを全部排斥して、本来の姿を回復しようとなさった。そのイエスの振舞いに対してパウロはすごく反逆していたわけです。それがダマスコで引っくり返される。そして召されて、反逆の罪が赦されて、いわば一番弟子に^{ばってき}拔擢された。ペテロたちはエルサレム本山で従来の伝統的なユダヤ教の中でキリスト教を始めたわけですが、パウロはそれと絶縁して、旧約的な世界から絶縁して、異邦人に向かつて、



「イエス・キリストは主である」

ということ伝えていくという役目をいただいた。

だから、パウロはこのローマ書の出だしからして、第1章1節のところに、

「キリスト・イエスの僕、召されて使徒となり、神の福音のために選り別れたるパウロ」

とあります。まず

「キリスト・イエスの僕」

と書いてます。それから、

「召されて使徒となり」

と。つまり、自分から立候補したのではなくて、召されたのだと。皆さんも召されたんです。そして、「神の福音」というのはキリストのことです。神の福音がキリストの中に現れているというので、

「神の福音のために選り別れたるパウロ」

と言いまして、6節に、

「⁶汝等もその中にありてイエス・キリストの有^{もの}とならん為に召されたるなり。」

と。異邦人であるあなた方もイエス・キリストのものとせられるために召された。自分で立候補したのではない。選り別れたのではない。神様が召してくださいました。あの反逆者パウロを召されたキリストが今度は、異邦人の今まで救いとは無縁であつたあなた方をも選んで召してくださいました。共通なんだと。そういうふうには、選り別れ召されて、そして片一方は使徒、片一方はキリストのもの——「キリスト者」というのはキリストに属する者、キリストと一体とされる者——そういうふうになった。そういう異邦人の信者たちのための伝道者という、それが一つの立場です。

それから、もう一つはやはり自分はユダヤ人である、イスラエル人である。その帰属意識、愛国心——あるいは民族愛と言つてもいい——それは絶対棄ててない。異邦人に向かつているけれども、自分はやはりユダヤ人である。しかも「ベニヤミンの族^{やから}」というのは物凄く血統がいい。ヨセフの系統ですから善い。キリストだつて、このイスラエルからお出になった。しかも、イスラエルにはいろんな意味で祝福が伴つていた。その同胞が依然としてキリストに反逆して、神様から見放された状態である、あるいは神様に逆らっている状態は、自分にとってはとても心の痛みである。異邦人のための伝道者でありながら、自分の同胞が救われてほしい。あんなに逆らっていた自分を救い上げてくださった神様、キリストにおいて救ってくださいました。そのキリストをどうぞ同胞のイスラエル人が受け入れてくれるようにと、それを痛いほど心を感じている。自分の責任だと思つていて。異邦人伝道は神様から賜つた使命だけれども、自分の心では、

「同胞が救われてほしい」



という願いは熱烈なものがある。たとえ自分がキリストに呪われて棄てられて地獄へ落ちることと引き換えられても、自分たちの同胞が救われてキリストのものになってほしい。この愛国心、民族愛がある。

そうすると、そこで出てくるのは、なぜ神の、直系の相続人であるべきイスラエル人が棄てられて、反逆することによって棄てられて、そして、あの全然無関係であった異邦人がパッと選ばれて、そして神の民だと言ってニコニコ笑っているか。こんなことではがまんがでない。いったいイスラエルと異邦人のこの二つの関係はどうなっているのか。救いということに関して、異邦人が救われて、ユダヤ人のほうは棄てられ放しですむのか。そうじゃない。やはり彼らももう一度戻って来なければならぬ。そうでないと、この物語は終わらない、ストーリーは終わらないという、そういうことをずっと言っている。

そうしたら、旧約聖書からそれを論証していかなければいけない。なぜこうなっているのか。それでいろんな引用が出てくるわけです。そういう角度からずっと見て行きたいと思います。

●ローマ書第9章

そうすると9章です。つまり8章までとガラツとここで局面が変わっているわけです。

「我キリストに在りて真をい^{まこと}い^{いつわり}虚偽を言わず、²我に大なる憂^{うれい}あることと心に絶えざる痛^{いたみ}あることとを、我が良心も聖霊によりて証^{あかし}す。³もし我が兄弟わが骨肉の為にならんには、我みずから詛^{のろ}われてキリストに棄てらるるも亦ねがう所なり。⁴彼等はイスラエル人にして、彼らには神の子とせられたることと、栄光と、もろもろの契約と、授けられたる律法と、礼拝と、もろもろの約束とあり。

イスラエルは神の民であった。アブラハムやモーセを通して与えられた契約や律法がある。律法は、一つは「かくあるべし」という行為規範です。それからもう一つは礼拝の規範です。宗教というのはすべて、祭儀、お祭り、礼拝の儀式というものを求めますから、それがレビ記なんかに詳しく出てくるわけです。そういう律法と礼拝ともろもろの約束をちゃんといただいている。

⁵先祖たちも彼等のものなり、肉によれば、キリストも彼等より出で給いたり。

この「肉によれば」というのは、ローマ書第1章に出てくる。福音ということに触れまして、

「神の福音のために選^えび別^われたるパウロ」と言いまして、3節に、

「³御子は肉によれば、ダビデの裔より生れ、⁴潔き霊によれば、死人の復活により大能をもて神の子と定められ給えり、即ち我らの主イエス・キリストなり。」



と言ってます。「肉」というのは外側ですね。外側はマリヤから生まれた。人の姿でお生まれになった。そしてそれはダビデの家系である。もちろんヨセフはダビデの家系ですけれども、ヨセフとマリヤさんは関係なくイエス・キリストは生まれたことになっていますから。そこはおかしいけれども、一応、ヨセフというものを親としているものだから、肉によればダビデの家系である。でも、霊という次元で見れば、これはもう神様と直結していらつしやるお方であるということです。

この9章に戻りまして、肉によればキリストも彼らから出てきたお方である。次の、

「キリストは万物の上にあり、永遠に讃むべき神なり。アアメン。」

については、議論があるようでして、別の訳として、

「万物の上にいます神は永遠に讃むべきかな」

とも訳すと書いてある。おそらくそつちのほうが正しいのだろうと言われている。というのは、パウロはキリストを直接、神とは他のところでは言っていない。神から遣わされたお方がイエスで、それが復活によつて「キリスト」という座を示された「膏注あぶらがれた者」です。「神の右にいますキリスト」とか、パウロは決してキリストを直接、神とは呼んでいないのに、ここで

「キリストは万物の上にあり、永遠に讃むべき神なり」

というのはちよつとそぐわない。だから、これは

「万物の上にいます神は永遠に讃むべきお方である」

というほうが適當ではないかというふうに註解書なんかには書いてありました。まあその程度で結構です。

要するに、パウロはいろいろ書いているうちに、感きわまつて、「アアメン！」というすぐ祈りになるんですよ。そういうのがパウロなんです。そして、

6 それ神の言はすた廃りたるに非ず。イスラエルより出づる者みなイスラエルなるに非ず。

そもそも肉の問題ではない。イスラエルから出ているものは全部イスラエルか。そうではない。肉のイスラエルではだめだ。霊のイスラエルにならねばだめだ。そういうふうに、外なる姿と内なる姿とを分けているわけです。

7 また彼等はアブラハムの裔なればとて皆その子たるに非ず

アブラハムの子孫だと言ったって、本当にアブラハムの心を心としている者、アブラハムの生き方を自分のお手本にして従っている者、それが本当のアブラハムの子であつて、単に血統がアブラハムから出ているということではだめだ。

これは、たとえばルカ伝のイエス・キリストの伝道の所に、洗礼のヨハネというのが出てきて、

「自分たちの先祖にアブラハムがいるなんて思ったら大間違いだ。お前たちの



行いになつておらんではないか。まず悔い改めろ。そのうちにイエスというお方が来て、麦と毒麦とを振り分けるようにして、あるいは麦の粒ともみ殻とを振り分けるようにして、もみ殻は火をもって焼き尽くす。キリスト・イエスという方がおいでになるから、心を悔い改めろ」

なんて言つて、盛んに激しくヨハネは迫りました。その時にも洗礼のヨハネは、

「**血統的なイスラエルではない。自分の本質、行い、姿が本当にアブラハムに相応^{ふさわ}しいかどうか、それをよくよく考えろ**」

と言いました。そういつたことをここにまたパウロも述べているわけです。アブラハムのすえだからといって、みながその子であるわけではない。

『**イサクより出づる者は、なんじの裔と称えらるべし**』とあり。

これは引用の第一回目ですが、創世記21章12節の引用です。要するに、イサクというのは——アブラハム、イサク、ヤコブですね——イサクから出てくる者が本当の跡継ぎだよという、それだけのことです。

8 **即ち肉の子らは神の子らにあらず、**

外側の問題ではない。

ただ約束の子等のみ其の裔と認めらるるなり。

ここで「肉の子」と「約束の子」という言葉が出てきましたが、パウロは「約束」ということを言います。「約束」とか、「恵みの選び」という言葉も出てくる。「約束」というのは、神様が一方的に

「あなたにこんな祝福を与える。あなたはこうだよ」

と言つて、こつちの姿とは無関係に、神様のほうでドーンと祝福を約束なさる。それが「約束」であつて、これはこちらの受け手のほうが善いから悪いからという、それを超えたレベルの問題なんです。「恵みの選び」とか、あるいは「召された」というのは、全部、「恵み」というのはこちらの側に根拠がない。神様のほうで一方的に選んだもうた「恵みの選び」でしょ。選んでくださる。それから「召される」。全部、神の側に、神の意志のほうに根拠があつて、こちらの側には根拠がないということを言いたい。

霊の次元なんです。「霊」というのは本質というか、そういうところですね。それに対して、肉という姿では——「肉」と呼んでいるものはすべてこちらの側を問題にしている——

「**自分は血統がいい。アブラハムの血統だ、ベニヤミンの族^{やから}だ、パリサイ人^{びと}**」

中のパリサイ人だと、自慢しようと思つたらいっぱいあるんだよ」

ということのパウロはピリピ書の中で言いました。でも、そんなものは全部、塵芥^{ちりあくた}のように思つていふ。それはキリストがあまりにも素晴らしいから。キリストというお方の中には、他のものは全部、塵芥と一緒に言いました。

ああいうことを思い浮かべていただくと、肉の誇りということが、血統はどうか、家系



はどうかと——結婚問題でもありますね。あの人はどういう、もともと先祖は貴族であつてとか、公爵様であつてとか。ろくなことないですよ、あんなのは。大体そういうことを鼻にかけて威張つて、他の人を見下して「なんだ、町人の息子ではないか」なんてなことを言っている奴はろくなことはない——そういうのを「肉」という。肉の心です。

それに対して、こちらの「霊」のほうは神様のほうから一方的に選ぶんですから。こちらの側には根拠がないから、そうすると、「ありがとうございます」という言葉しか出てこないわけです。こちらは、「受けとる」ということ。約束をいただきます。恵みの選びをいただきます。召されたら、

「はい、ありがとうございます」

と、全部、受け身であつて、それを受諾する。「はいっ」と。これが「信仰」ということなんです。「信仰」というのは難しいことではなくて、神様のお言葉、神様の御旨を

「はいっ」

と言つて受けとるだけです。これが「信」なんです。それに対して、

「いやいやいや、私の判断によればこうです」

とか言つて、神様を審査して、

「おう、受け入れてやつてもいいがね」

なんていう、人間が主になつて、神様が審査対象になつている。

「この神の御意は、これは受け入れてやつてもいい。しかしこれはとてもかなわんと。そういう世界がこの「肉」の世界です。そういつたところへこれは繋がっていく。

それです、イサクより出る者が子孫と称えられるんだと。

8 即ち肉の子らは神の子らにあらず、ただ約束の子等のみ其の裔と認めらるるなり。9 約束の御言は是なり、曰く『時ふたび巡り来らば、我きたりて

サラに男子あらん』と。

約束の御言は何だったかという、神の使いが旅人の姿でやつて来る。そして、サラやアブラムに対して、

「来年、私ともう一度来る時には、サラは男の子を産んでいるよ」

なんていう約束をする。それで笑うんですよ、サラも心の中で笑う。アブラムは「はい」と言いながら心の中で、

「99歳にもなっているこんな年寄りに子どもなんか産めるものか」

と呟つぶやいている。そういうのがちゃんと創世記に出てきます、創世記18章10節と14節に。創世記というのはとても面白いから、物語として読んだらいい。出エジプト記くらいになつてくると、だんだん気が重くなつてくるけれども、創世記はとても面白い。だから、愛読なさってください。

その次は、さきほどのヤコブとエサウの話が出てくる。お母さんはレベカです。レベカ



をお嫁さんにする話も創世記に実にうるわしく書かれていますから、それも楽しみにお読みください。

¹⁰ 然のみならず、レベカも我らの先祖イサク一人によりて孕^{みこ}りたる時、¹¹ 其の子いまだ生まれず、善も悪もなさぬ間に、神の選びの御旨は動かず、

ヤコブは手の込んだことをやって、長子の権を奪い取る。弁護する人たちは、

「そこまでヤコブは熱心だ。その熱心がいい。エサウはせつかく長男の権利をもらっていないながら、それを大したものと思っていない。一碗のスープと引き換えにそれを売り飛ばすくらいの、軽く家督というものを、つまり神の国を継ぐということとその程度にしか思っていない。だから、こんなものは神様に喜ばれるはずがない」

と言うが、聖書はそんな理屈ではない。

まだ生まれず、善も悪もなさぬ間に、神の選びの御旨は動かず、¹² 行為によらで召す者によらん為に『兄は次弟に事^{おとうと}うべし』とレベカに宣^{のたま}えり。

「行為による」というのは、肉のほうです。人間の側に根拠がある。

「お前はいいことをしたから、こうしてやる」

という、そういった行為によらず、選びは相手の姿とは関わりなく、「これだ」と決めた通りにする。これが、ここにあがっているところで、これは創世記25章23節に出ています。

¹² 行為によらで召す者によらん為に『兄は次弟に事^{おとうと}うべし』とレベカに宣^{のたま}えり。

と。これはまだお腹の中に赤ちゃんが二人いるときに、神はレベカに対してこのように、兄は弟に仕えるんだよということを抑る。

¹³ 『われヤコブを愛しエサウを憎めり』と録されたる如し。

これはマラキ書という旧約聖書の一番最後の書に出てくる。1章2節から3節に、「ヤコブを愛し、エサウを憎んだ」ということが書かれてある。

¹⁴ さらに何をか言わん、神には不義あるか。決して然らず。

そうしたら、いったいどういうことかと。神様は不義なのか、無茶苦茶な神様なのかと。いやいや、そうじゃない。

¹⁵ モーセに言い給う『われ憐まんとする者をあわれみ、慈悲を施さんとする者に慈悲を施すべし』と。

「誰をあわれむか、それは俺の勝手だよ。こいつをあわれもうと思つたらあわれむ。

これに慈悲を施そうと思つたら施す。わしの勝手だよ、文句あるか」

と。そういうふうには、神様は要するに身勝手だというわけです。それをモーセにちゃんと仰つた。これは出エジプト記33章19節に出てくる。そうすれば16節、これが結論です。

¹⁶ されば欲する者にも由らず、走る者にも由らず、ただ憐みたもう神に由るなり。



「欲する」というのは意欲です。「走る」というのは実績です。意欲があるとか、実績を積んでいるとか、そんなことではない。憐れみ給う神による。……

17 パロにつきて聖書に言い給う『わが汝を起こしたるは此の為なり、即ち我が能力ちからを汝によりて顕し、且わが名の全世界に伝えられん為なり』と。

「パロ、お前をエジプトの王にしたのは私だよ。目的は何か。私の力をお前を通して顕し、かつ私の名前が全世界に伝えられるための、お前は道具にすぎない」

と。これは出エジプト記9章16節。もう神様というのは目茶苦茶じゃないかと。

18 されば神はその憐れみと欲する者を憐れみ、その頑固かたくなにせんと欲する者を頑固にし給うなり。

だから、パロが心を頑かたにしたのは、神様の半分責めがありますけれども、パロ自身もやはり頑ななんですよね、出エジプト記全体を見ますと。なにも神様だけのせいではないと思いますけれども。こんな次第なんだということをパウロはぬけぬけと言ってます。

そうすると普通ならば、

「それなら、神様なんては人を咎とがめる資格はあるかいな。罪を犯したら、罪を犯させたのは神様だ」

と。へんなことやったら、神様がそうしたんだと。

「お前は頑なだな」

「うん、神様が頑なな人にしたんだ」

と。そういうふうなことになるってしょうではないかと。

19 さらば汝あるいは我に言わん『神なんぞなお人を咎め給うか、誰かその御定みさだめに悖もとる者あらん』20 ああ人よ、なんじ誰なれば神に言い逆うか、造られしもの造りたる者に対して『なんじ何ぞ我を斯く造りし』と言うべきか。21 陶工すえつくりは同じ土塊つちくれをもて、此を貴きに用うる器とし、彼を賤いやしきに用うる器とするの権なからんや。

自由自在ではないかと、創り主は。そして更にこれを人間に適用しまして、

22 もし神、怒いかりをあらわし権力ちからを示さんと思しつても、なお大なる寛容おおいをもて、滅亡ほろびに備そなわゆる怒の器を忍び、23 また光栄のために預じめ備え給ひし憐憫あわれみの器に對むかひて、

これは片一方はイスラエルなんです。反逆でしよ、神に背いていますから。そういう滅びに備わっている怒り——怒りというのは神の審判さばきと考えたらいいです——審判を受ける器に対しても我慢なさっている。大いなる寛容をもつてそういう審判を与えない。それからまた一方、異邦人。これは神の光栄のために予め用意あらかじしてくださっている。これは憐れみの器。恵みに対して憐れみ。神の憐れみの器として異邦人は初めから、予定されていた。そういう器に向かって栄光の富を示そうとなさる。つまり、予定外のものが選ばれて祝福



を受ける。感激しますよね。片一方は本来、審かれて当たり前なんです。それを審かないで我慢していらつしやる。それが神様なんだと。そして、

その栄光の富を示さんとし給いしならば如何に。²⁴この憐憫の器は我等にして、ユダヤ人の中よりのみならず、異邦人の中よりも召し給いしものなり。

この「憐れみの器」というのは異邦人だ、と断定しましたけれども、異邦人の中から憐れみの器が出てくる。ユダヤ人からも憐れみ器が出てくる。そうすると、ユダヤ人でも二つに分かれるわけです。「怒りの審判の器」を我慢しておられる。しかし、その我慢の限界がきたら、審判がくだる。ところが、悔い改めるような——パウロみたいな——そういう引っくり返されるものは「憐れみの器」で、異邦人と同じグループに入れてもらえる。結局、その憐れみを受けるか受けないか、こういうことになってくるんだという。

それから、ホゼヤ書が出てきます。これはホゼア書の2章25節、2章1節、この二つが出てきます。

²⁵ホゼヤの書に『我わが民たらざる者を我が民と呼び、愛せられざる者を愛せらるる者と呼ばん、²⁶「なんじら我が民にあらず」と言いし処にて、彼らは活ける神の子と呼ぶるべし』と宣給^{のたま}える如し。

即ち、神様のほうは初めの予定と全然違うことをなさった。本来、民でない者——異邦人ですね——それを「我が民」と呼ぶよと。愛されていなかった者を「愛される者」と呼ぶよ。「お前たちは私の民でない」と言った所で、逆に神の子と呼ばれる。そういう逆転現象が生じるということをホゼア書の中でうたわれる。

それから、ユダヤ人についてはイザヤ書が引かれている。これはイザヤ書10章22節、23節は有名なところですね。

²⁷イザヤもイスラエルに就きて叫べり『イスラエルの子孫の数は海の砂のごとくなりとも、救わるるはただ残^{のこり}の者のみならん。²⁸主、地の上に御言をなし了^おえ、これを遂^すげ、これを速^{すみ}かにし給わん』²⁹また『万軍の主われらに裔^{のこ}を遺し給わずば、我等ソドムの如くなり、ゴモラと等しかりしならん』とイ

ザヤの預言せしが如し。

「ソドム、ゴモラ」というのは、頽廢の町だった。墮落していて、そして——火山の爆発か何かでしようか、その溶岩か何かが流れてきて——全部亡びてしまった。「ソドム、ゴモラ」は悪徳の象徴みたいなものです。もしも、万軍の主が私たちに子孫を残してくださいださらないならば、とつきの昔にソドムやゴモラと同じようにされていたであろうと。これはイザヤ書の1章9節にある。

³⁰然らば何をか言わん、

ではいったい、今までのことをずっと振り返ってみて、どうということが結論として出てくるんだろうかというわけです。



義を追い求めざりし異邦人は義を得たり、即ち信仰による義なり。³¹ イスラエルは義の律法を追い求めたれど、その律法に到らざりき。³² 何の故か、かれらは信仰によらず、行為おこないによりて追い求めたる故なり。

ここでの少し立ち止まりたいと思います。これはさきほどのカトリック系のフランシスコ会訳では、

「³⁰ それでは、どうでしょうか。救いの義を求めなかった異邦人が、義、すなわち信仰による義を得ました。³¹ ところが、イスラエルは、救いの義をもたずものとして律法を追い求めたが、そのような律法には達しませんでした。³² なぜでしょうか。救いの義が得られるのは、信仰によるのではなく、行ないによるものと考えたからです。彼らはつまずきの石につまずいたのです。」

始めのほうの「義」ということを「救いの義」とわざわざ訳している。新共同訳では、これは今、文語で読みましたものと同じような内容ですね。

「³⁰ では、どういうことになるのか。義を求めなかった異邦人が、義、しかも信仰による義を得ました。³¹ しかし、イスラエルは義の律法を追い求めていたのに、その律法に達しませんでした。³² なぜですか。イスラエルは、信仰によってではなく、行いによって達せられるかのように、考えたからです。彼らはつまずきの石につまずいたのです。」

この「達せられるかのように」という訳がとても面白いと思います。これは文語訳では出てきてない。

「³¹ イスラエルは義の律法を追い求めたれど、その律法に到らざりき。³² 何の故か、かれらは信仰によらず、行為おこないによりて追い求めたる故なり。」

という訳ですけれども、ルターの訳を調べてみました。そうすると、その「かのように」というのがちゃんと出てきているんですよ。しかも、「信仰による義」とか「律法による義」というのを、ルターの訳を見ますと、非常に深い訳だなということを感じました。直訳的に訳しますと、「義」は「ゲレヒティヒカイト」(Gerechtigkeit) といいます。

「義を追い求めなかった、それに注目しなかった、そういう異邦人がその義を取得した、義をいただいた。私はこの際、信仰に由来する義について語っている。信仰から湧き出てくるような義、信仰から生じてくるような義について私は語っている。しかし、イスラエルは義の律法、義の法則を追い求めたけれども、それを注目したけれども、しかも、その義の法則、義の律法を獲得、到達することができなかった。なぜなのか。ユダヤ人たちはその義の律法を信仰に基づいて捜したのではなくて、あたかも自分の行ないに基づいてそれは取得できる、行ないに基づいてそれに到達できると考えたからだ。」

という訳なんです。



「信仰というものに根ざしてそれを求めたのではなくて」
と。だから、ユダヤ人は、パウロのように、せつかく神様から律法を賜ったモーセの十誡をはじめいろんなものを――

「これを守ればあなた方は命に到達できる」

と、ちゃんと書いてある――しかし、その「命に到達できるよ」という言葉をいただいたのに、それを

「それでは、私の力でやってみせる」

と――普通、誰でも思いますよね、そういうふう――「わが力、わが行ない」という自分のほうに根拠を置いて、そしてそれに向かって驕進ばくしんした。それが間違っていた。神様の御意の顕れである律法は、肉なる人間の努力で獲得できるものではありません。

「もつぱらあなたの恵み、憐れみ、お助け、つまり神様にすごることによって、やつとひよつとしたら到達できるかもしれません。どうぞ、お助けください」

という姿がイスラエルにはなかったという。

「自分はやっているが、お前はやってないじゃないか」

という審きになるわけです。比較が出てくるわけです。いかにも自分が一生懸命にやれば、それで到達できるかのごとく――「アズ・イフ」なんです――そうやったところに間違いがあつたと。これをルター訳と共同訳は出している。だから、この辺はちよつと面白いなと思いました。

彼らは蹟く石に蹟きたり。³³録して『視よ、我つまずく石さまたぐる岩をシ

オンに置く、之に依頼よりのたのむ者は辱はづかしめられじ』とあるが如し。」

これはイザヤ書の8章14節と、28章16節。イザヤ書の中に二回出てくる。

●ローマ書第10章

そして、10章へ続いていきまして、

「兄弟よ、わが心のねがい、神に対する祈は、彼らの救われんことなり。

これはまた元へ戻りましたね。心に痛みがある。彼らがなんとしても救われてほしいという所へまた戻ってきました。ユダヤ人はいつたにどうなんだと。

²われ彼らが神のために熱心なることを証す、されど其の熱心は知識あかしによらざるなり。

彼らが神のために熱心であることはよく分かる。しかしながら、その熱心は本当の深い知識――叡知というか――神の智慧に基づく熱心ではなくて、己が智慧、己が知識によっている。だから、誤ったんだ。自分がその姿だったから。

³それは神の義を知らず、己の義を立てんとして、神の義したに服したがわなければなり。

自分の義であつて、神様の義ではない。だから、ここでも「自分の義」とか「神の義」と



いうのを言い換えると、「自分の義」は「己が思い、己が意志」、「神の義」というのは「神様の御意、神様の御旨」です。自分の思いを優先させて、神様の御思いがいかなるものかということまで深く思いめぐらさない。それで結局、失敗してしまったんだということです。そして、

4 キリストは凡て信する者の義とせられん為に律法の終^{おわり}となり給えり。

ここで「義とせられん」ということは、「神様に受け入れていただく」ということです。神様に「それでいいんだよ」と言って受け入れていただくために、もう律法というものに終止符をうたれた。もう律法の世界にサヨナラと。キリスト自身は律法を果たした。ただ一人キリストだけがあのモーセの律法を満たした。いや、モーセの律法以上の世界をキリストは生きたわけですから。神の御意そのものになった。それによってもう律法は終わった。「律法よ、サヨナラ」ということになったんだよと。

だから、パウロという人は、特にガラテヤ書なんかをぐらんになりますと、

「律法は呪いである」

とまで言っている。律法というのは本来、人を生かすもののはずだった。それが、人を生かすべきその神の聖なる律法が、人をあんなに苦しめる。もう律法なんかくそくらえだ。その律法という呪いから解放するために、イエスご自身があの「呪いの十字架」、

「すべて木に掛けられる者は呪われる」

という、あの「呪いの十字架」にご自分をお掛けになって、そして律法の呪いから私たちを釈放してくれた。ちょうど出エジプトみたいに奴隷状態から。律法という世界の奴隷です。絶えず恐れがあるわけです、律法は。ちよつとでも外れたらもうダメなんですから。そういう律法に縛られて、内的に平安がない。恐ればかりがある。そういつたいじけた状態から解放放つて、

「さあ、お前は神の子だ。自由にはばたけ」

という世界をくださったんだということをガラテヤ書の中で本当に言っている。それはパウロ自身の経験だからです。だから、

4 キリストは凡て信する者の義とせられん為に律法の終となり給えり。

と。キリストは、彼に依り頼む者が受け入れていただくために、そういう律法の次元の終りとなつてくださった。律法という次元から解放放つてくださった。

ここから先のところはちよつと不思議なことが書かれている。

5 モーセは、律法による義をおこなう人は之によりて生くべしと録^{しるし}したり。

これはレビ記の18章5節という所に、こういう

「律法を本当に生きる者は命に至る」

ということをやっています。ルター訳は次のように言っている。

「律法というものから出てくる義、律法に基づいて生ずる義を人が行うならば、



その人はそれによって生きる」

と。だから、律法による義を本当に満たすならば、その人はそれで生きる。しかしながら、信仰に基づく義、信仰から生まれてくるところの義というものについては、申命記30章11節から14節に次のように言っているというので、出てくるのはちよつと分りにくいところなんです。

⁶されど信仰による義は斯くいう『なんじ心に「誰か天に昇らん」と言うなかれ』と。⁷これキリストを引下さんとするなり『また「たれか底なき所に下らん」と言うなかれ』と。是キリストを死人の中より引上げんとするなり。

これは私はさっぱり分からなかった、何のことを言っているのか。どうも私が推測するのに、

「なんじ心に「誰か天に昇らん」と言うなかれと。これキリストを引下さんとするなり」

「天に昇るなんていう者はおらんではないか」

と言うな。それはキリストは昇られたのだから。そのせつかく昇られたキリストを引き下ろすことになるではないか。キリストはただ一人、天に昇ってくださったのではないかと。それから、

「たれか底なき所に下らんと言うなかれと。是キリストを死人の中より引上げんとするなり。」

「底なき所」は地獄ですね。

「黄泉^{よみ}の深みへ誰が行ったであろうか。そんなことはありえない」

と、そんなことを言っただけだ。キリストはそこまで落ちて、そこで苦しんでいる者たちを救い上げられたではないか。だから、そういうった

「地獄に落ちるなんてないよ」

なんて言ったらいかん。キリストを死人のうちから引き上げてしまう。そうすると、地獄の底にいる人は救われなくなりますから。キリストは底まで下って行ってくださったんだと。そういうことだろうと、私は理解しています。これはルター訳を見ましても、何を見ても、そこまで書いてない。だから、ちよつとこの辺の引用は、パウロさんはどういふもので引用されたのかよく分りません。

そして次のところからまた面白いことが出てきます。では一体、どういことなんだと。信仰による義とは何を言っているのか。

⁸さらば何と云うか『御言はなんじに近し、なんじの口にあり、汝の心にあり』と。

これはどうもいろんな所からの引用らしい。

これ我らが宣^のぶる信仰の言なり。⁹即ち、なんじ口にてイエスを主と言ひあ



らわし、心にて神の之を死人の中より甦えらせ給いしことを信ぜば、救われるべし。¹⁰それ人は心に信じて義とせられ、口に言いあらわして救われるなり。パウロが宣べている信仰の言葉というのは次のようなものであると。

「口でイエスは主であると言いだらわす。それから、心の中で神様がイエスという方を死人の中から甦えらせ給うた、ご復活を信するなら、それで救われる。」

と。ルター訳を見ますと、

「イエスが主であるということをお口でもって告白するならば、そして、あなたの心において神はイエスを死人の中から甦えられたということを信するならば、あなたは救われる」

と。「口で告白し、心で信ずる」というのはそういう内容だと。イエスは主であるということをお告白し、そして神様がイエスを死人の中から復活せられたということをお心に信するならば、あなたは救われる。このルター訳を、

「人は心から信じるならば」

と、私は訳したい。日本語の訳では、「心に信じて」という。文語訳なら、

「心に信じて義とせられ、口に言いあらわして救われるなり」

となっている。共同訳で見ましても、

「実に人は心で信じて義とされ、口で公に言い表して救われるのです」

と。心で信じていればいいんですけども、ルター訳の「フォン ヘルツェン」「心の底から」という——「心からあなたを愛しております」とか、「心からあなたのことをお祈りしております」とか——我々は、「心から」と言うと、なにか非常に深い感じがしますね。「心に信じて」と言うと、「うむ、心に信じるのか」なんて、まあニュアンスの差でしょうけれども。要するに、正真正銘というかな、本気でイエスを信じる、イエスが主であるということをお信じる、そしてそのことを公に告白する。それが大事だと。確かに、信仰というのは人間の心の姿ですし、心の問題です。それが外にも表れてきますけれども、やはり告白という、

「人の前にイエスは主であるということをお告白する」

ということがとても大事なようです。福音書を見てましても、

「人の前で私のことを恥じる者、私を隠す者、公に言い表さない者は、私も神様の前で『あの人は知らんよ』と言う。人の前で私を否む者、私も神様の

前で『その人は知らんよ』と言うよ」

と。つまり、告白というのが非常に大事だということですね。言葉をもって言い表す。我々日本人で欠けているのは、奥さんとか、お父さんとか、お母さんとか、そういう人に向かって、日頃から「ありがとう」とかなかなか言わない。「愛しているよ」なんて、とんでもない、言わない。外国のほうはどうですか。毎回、「イッツヒ リーベ デイッツヒ」（愛して



いるよ」とチューをしている。あれがないと危ないのかなときえ思うくらいに、外国人というのは大げさですよ。会えば抱きしめる、両方の頬にチューをする。そして、「イッヒリーベ デイツヒ」とか何とか、そういうこと言わなければもたないほどにあぶない。それに対して、日本人は何も言わなくても分り合っているという、ひとつの暗黙の了解があるのかも知れませんが。まあ両極端はいけませんね。やはり真ん中がいいのじゃないでしょうか。人間ですから、せつかく言葉をいただいているんだから、行動で表すということが大事ではないのかなと思います。

11聖書にいう『すべて彼を信ずる者は辱しめられじ』と。12ユダヤ人とギリシヤ人との区別なし、同一の主は万民の主にましまして、凡て呼び求むる者に對して豊かなり。13『すべて主の御名を呼び求むる者は救わるべし』とあればなり。

そこからまた面白いことが出てきます。

14然れど未だ信ぜぬ者を争で呼び求むることをせん、未だ聴かぬ者を争で信ずることをせん、^{のべつた}宣伝うる者なくば争で聴くことをせん。15遣されずば争で宣伝うることをせん

「呼び求めろ、呼び求めろ」と言うけれども、信じていない方をどうやって呼び求めることができるのか。信じたら、呼び求めることができる。しかし、聞いてない人をどうして信じることができるのか。聞くということはやはり、宣べ伝えてくれる者があつて、初めて聞くということが出てくるのではないか。しかし、宣べ伝えるということも自分勝手に立候補するわけではない。神様に遣わされて初めて宣べ伝えるということが出てくる。こういうふうに、選ばれ、遣わされ、そして宣べ伝え、御言を伝え、その御言によつて信ずるということが出てくる。信ずることによつて、御名を呼ぶということが出てくる。そういう順序だと。そうすると、伝道ということ、御言を語るということ、それがいかに素晴らしいことかもわかると言つて、次に、

『ああ美^{うつく}しきかな、善き事を告^{つと}ぐる者の足よ』と録^{しる}されたる如し。

この「善き事」というのは、善き音信、^{おとずれ}グッドニュースということですよ。これが「福音」ということです。これは起源からいうと、註解に出ていたけれども、

「これはバビロン捕囚からのユダヤ人の釈放と帰還、それからエルサレムの再建という善い知らせをもたらす使者、神の使いの到来が間違いないことを描いたものである。その後、この救いの知らせをすべての国が知るようになることが預言されている。このイザヤ書の「善い知らせ」という言葉が福音という言葉の起源であらう」

ということが書かれています。だから、あのマラソンもそうですね、「われ見たり、来たり、勝てり」ととにかく勝利を必死になつて伝えたわけですね。そしてばったり倒れたという。



つまり善き知らせを持つてきた。

バビロン捕囚されて、それに対して、これはもう解放されてエルサレムに帰り、エルサレムを復興するよという知らせを預言者が民に伝える。そういう知らせを受けた民はすごく喜ぶわけです。捕囚とエルサレム帰還との関係、つまりそういうところから、善き知らせを告げてくれる飛脚の足はとても素晴らしいなという、そういうことから来たようです。

『ああ美^{うるわ}しきかな、善き事を告ぐる者の足よ』と録^{しる}されたる如し。

ということになってきます。けれども、伝えられたからといって、みな聴いたかというところ、そうはいかんとするのがまた出てきます。

16 されど、みな福音に従いしにはあらず、イザヤいう『主よ、われらに聞きたる言を誰か信ぜし』¹⁷斯く信仰は聞くにより、聞くはキリストの言による。

要するに、信仰というのはまず神の言葉を聞くということから始まる。これが大事なんです。神の言葉を無視して、自分の頭で神様を想像したり、創りだしたり、それでは全然だめなんです。日本の知識人の欠陥はそれだと思う。自分の頭で

「神は有るか、無いか」

とか、

「神が有つたら、なぜあんな戦争を始めるのか。あのキリスト教の歴史を見よ、く

だらんじゃないか」

とか、そういうふうには、直接、福音書とか神様の御言に体当たりして、そこから掴^{つか}んでくることをしないで、それは伏せておいて、周辺のなことを根拠にして、あるいは哲学的な思索によつて「神は有るか、無いか」とか言つてやつていて、それで無神論だとか、「キリスト教は嫌だ^{いや}」とか、それが割合に日本人の知識人に多いように思う。それに対して、やはり本気で新約聖書にとつくんで、その中から掴^{つか}みだしてくる。それでも

「やつぱり俺はこれは嫌だ」

と言つたら、これはしょうがないですね。でも、せめてそういう格闘、取っ組み合い、これはやつてほしい。専門の方々に対してはそれを——パウロが同胞のために痛みを訴えるならば——私は日本の同胞に対して、せっかく素晴らしい民族であるのに、なぜイエス・キリストという方に対しては、頑ななのであろうかと。しかも、根拠は全くおかしいんですね。さっきの寂聴さんの

「あの十字架がねえ」

なんて言っているのではない。

イザヤもそう言っていると。

18 されど我いう、彼ら聞こえざりしか、然らず

『その声は全地にゆきわたり、其の言は世界の極にまで及べり』



これは詩篇の19篇ですね。

「もろもろの天は神の栄光をあらわし、穹蒼はその手のわざをしめす²この日
ことばをかの日につたえこのよ知識をかの夜におくる³語らずいわずその声
きこえざるに⁴その響きは全地にあまねくそのことばは地のはてにまでおよ
ぶ」

この引用です。即ち、それは聞こえていないのではない。全部、神のみ声は響きわたつ
ているんだと。特にイスラエルではそうですね。もう旧約聖書に精通している人が多いわ
けですから。

¹⁹我また言う、イスラエルは知らざりしか、先ずモーセ言う『われ民ならぬ
者をもて汝らに嫉^{ねたみ}を起こさせ、愚^{おろか}なる民をもて汝らを怒らせん』

つまり、異邦人を神様が愛したもう、顧みたもう。そのことでユダヤ人はひがむ。

「なぜあんな異邦人に目をかけて、俺たちは直系なのに俺たちは除け者にされてい
るのか。それは異邦人を通してユダヤ人を刺激しているんだ」

と。「愚かなる民をもて怒らせん」というのは、怒りから今度は、

「よし、やつたるぜ」

というふうに奮起を促しているんだというわけです。

²⁰またイザヤ^{はばか}や憚^{ねたみ}らずして言う

『我を求めざる者に、われ見出され、我を尋ねざる者に我あらわれたり』

つまり異邦人です。

²¹更にイスラエルに就きては『われ服^{したが}わずして言いさからう民に、終日手^{ひねもす}
伸べたり』と云えり。

これもいろんな引用なんです。始めの

「われ民ならぬ者をもて汝らに嫉^{ねたみ}を起こさせ、愚^{おろか}なる民をもて汝らを怒らせ
ん」

というのは、申命記の32章21節からの引用です。それからイザヤの引用は65章1節、それ
からもうひとつは65章2節。要するに、異邦人を顧みることを通して、ユダヤ人を刺激し
て妬みを起こさせて目覚めさせる。

「こんな異邦人に俺たちは劣後していいはずはない。もう一回、汚名挽回でがんば
るぜ」

という、励ましのためだというふうなことをパウロは言いたいわけです。

●ローマ書第11章

第11章に行きます。

「されば我いう、神はその民を棄て給いしか。決して然らず。我もイスラ



エル人にしてアブラハムの裔^{すえ}ベニヤミンの族^{やから}の者なり。²神はその預^{あら}め知り給いし民を棄て給いしにあらず。汝らエリヤに就きて聖書に云えることを知らぬか、

あのエリヤのを見てごらんと。エリヤはバアルの預言者たちと戦う。イザベルという悪い女王の命をうけたバアル崇拜の預言者がたくさんいた。これは列王記に出てくるけれども、エリヤはたった一人で350人のバアルの預言者を相手に戦うわけです。戦って勝つけれども、今度はイザベルがエリヤの命をねらって刺客を送る。それでエリヤは逃げ回る。そのことがここに出てきて、

彼イスラエルを神に訴えて言う、³『主よ、彼らは汝の預言者たちを殺し、なんじの祭壇を毀^{こぼ}ち、我ひとり遺^{のこ}りたるに、亦わが生命をも求めんとするなり』と。⁴然るに御答は何と云えるか『われバアルに膝を屈^{かが}めぬ者、七千人を我がために遺^{のこ}し置けり』と。⁵斯くのごとく今もなお恩恵^{めぐみ}の選^えびによりて遺れる者あり。⁶もし恩恵によるとせば、もはや行^{おこな}いによるにあらず。然らずば恩恵はもはや恩恵たらざるべし。

人間の側に根拠があるわけではない。もし人間の側に根拠があるとしたら、もう恵みではなくなってくる。

⁷さらば如何に、イスラエルはその求むる所を得ず、選ばれたる者は之を得たり、その他の者は鈍くせられたり。⁸『神は今日に至るまで、彼らに眠れる心、見えぬ目、聞こえぬ耳を与え給えり』と録されたるが如し。

これもイザヤ書からの引用です。

⁹ダビデも亦いう

『かれらの食卓は糲^{わな}となれ、網となれ、つまずきとなれ、報^{むくい}となれ、¹⁰その眼は眩^{くら}みて見えずなれ、常にその背を屈^{かが}めしめ給え』

¹¹節からは大事なところです。いよいよ異邦人とユダヤ人の関係はどうなるのかと。ユダヤ人は棄てられっぱなしで、それで済むのかと。絶対そうではない。ユダヤ人は必ず救われる。それから異邦人に向かつては、

「異邦人よ、驕^{おご}るなかれ」

と出てくる。自分が救われたからといって、ユダヤ人を軽蔑したり、無視したりするのは許されない。神様の思^{おも}ひ召しによつて一時的に彼らは見捨てられているだけであつて、その峻厳な審判をしっかりと理解しないと、あなた方だつて同じように神の審判に合つてしまうことになるよ、という警告を異邦人に対して発している。これが以下のところです。

¹¹されば我いう、彼らの躓^つきは倒れんが為なりや。決して然らず、反つて其の落度によりて救は異邦人に及べり、

キリストに躓いて、それが永久に倒れてしまうためか、起き上がれないためであるか。そ



うではない。かえって、その落ち度、彼らの失敗によって救いが異邦人に及んできた。一時的にイスラエルが退けられて、異邦人がおこぼれにあずかったというわけです。

これイスラエルを励まさん為なり。

イスラエルを激励するために、一時的に彼らは退けられて、異邦人というのがひよつこりと召されて、ものすごい得をする。

¹²もし彼らの落度、世の富となり、その衰微、異邦人の富となりたらんには、まして彼らの数満つるに於ておや。

彼らが戻ってきたらどうなるか。今は引き潮のように波が遠くへ退いている。けれども、その波がまた戻ってきて満ち潮になったらどうするか。

¹³われ異邦人なる汝等という、我は異邦人の使徒たるによりて己が職を重んず。

これはさきほど言いましたパウロの二重性ですね。一方では召されて、異邦人のための使徒となった。しかし、同時にイスラエルの民族である。

¹⁴これ或は我が骨肉の者を励まし、その中の幾許かを救わん為なり。¹⁵もし彼らの棄てらるること世の平和となりたらんには、其の受け納れらるるは、死人の中より活くと等しからずや。

まさに復活に等しい。

¹⁶もし初穂の粉潔くば、パンの団塊も潔く、樹の根潔くば、其の枝も潔からん。パンをこねる時にイースト菌とかを入れるわけでしょ。そういう粉が清かったならばパンの塊全体が清められる。木の根っこが清かったら、その枝もみなそこからでてくる樹液を吸いますから清まる。要するに根っこ、源が大事だということを言いたい。

¹⁷若しオリブの幾許の枝きり落とされて野のオリブなる汝、その中に接がれ、共にその樹の液汁ある根に与らば、¹⁸かの枝に対して誇るな、たとい誇るとも汝は根を支えず、根は反って汝を支うるなり。¹⁹なんじ或は言わん『枝の折られしは我が接がれん為なり』と。²⁰実に然り、彼らは不信によりて折られ、汝は信仰によりて立てるなり、

これは、恵みを受けとったことによつて、あなたは立っている。「信仰」という言葉は非常に多義的ですので、あまり多用しないほうがいいと思います。私は、「信仰により」というという言葉が出てきた時には、常に「恵みにより、それを受けとったことにより」という、恵みの実体はキリストですから、「キリストによつて」立てられた。あなた方はキリストによつて立てられてあるんだと。

高ぶりたる思をもたず、反つて懼れよ。²¹もし神、原樹の枝を惜み給わざりしならば、汝をも惜み給わじ。²²神の仁慈と、その厳肅とを見よ。厳肅は倒れし者にあり、仁慈はその仁慈に止る汝にあり、若しその仁慈に止らずば、



汝も切り取らるべし。

恵みは、恵みによつて選ばれる、指名される。これは神様の側からの一方的な御旨なんです。こちら側に根拠がない。それをいかにも

「自分たちが立派だから選ばれた。自分たちは強い信仰があるから選ばれた」

とか、何か自分の側に根拠をもつようになったらだめだ。どこまでも恵みに対しては感謝、

「ありがとう。はい、御意を成させてください」

という、その平伏しの姿——それを砕けと言いましたが——そういう姿で接していけど、もしも高ぶった思いを持ったら、その途端にあなたは棄てられる。実はユダヤ人は高ぶった思いを持ったから、

「自分で何でもできる」

と、そう思ったから躓いた。それをもう一度、心から悔い改めて戻ってくる。つまり、イエス・キリストを救い主として受けいれてくるならば、その時は、第一順位であつて、異邦人は第二順位のはずだということをここで言うわけです。だから、あなた方がその恵みの中にとどまらないならば、あなた方も切り捨てられてしまうよと。

²³彼らも若し不信に止らずば、接がることあらん、神は再び彼らを接ぎ得給うなり。²⁴なんじ生来の野のオリブより切り取られ、その生来に悖りて善きオリブに接がれたらんには、まして原樹のままなる枝は己がオリブに接がれざらんや。

理由があつて一時切り捨てられたけれど、また再び接がれてくることが聖意であるはずだと。

²⁵兄弟よ、われ汝らが自己を聴しとする事なからん為に、この奥義を知らざるを欲せず、即ち幾許のイスラエルの鈍くなれるは、異邦人の入り来りて数満つるに及ぶ時までなり。²⁶かくしてイスラエルは悉く救われん。録して『救う者シオンより出で来りて、ヤコブより不虔を取り除かん、²⁷われその罪を除くときに彼らに立つる我が契約は是なり』とあるが如し。

これはエレミヤ記からの引用です。

²⁸福音につきて云えば、汝等のために彼らは敵とせられ、選びにつきて云えば、先祖たちの為に彼らは愛せらるるなり。

アブラハムが選ばれて祝福を受けました。その子孫なんですから、選びということでは彼らだってやはり同じように祝福にあずかる。

²⁹それ神の賜物と召とは変ることなし。

「召し」は不変である。一時的にフラフラしようが、それで神様はどうかなさるわけではない。理由があつて一時的に彼らは躓いてきまよっているけれども、必ず戻ってくる。彼らが躓いたのは、あなた方が救われるためなんだ。そういうご目的のために、自分の本



来の民であるイスラエルを一端裁かれた。それでも、目的を達したら、必ず彼らはまた呼び戻される。そういうことを言いたいわけです。

³⁰ 汝ら前には神に従わざりしが、今は彼らの不順によりて憐まれたる如く、
³¹ 彼らも汝らの受くる憐憫によりて憐まれん為に、今は従わざるなり。

不思議なことですね。つまり、不従順だったら憐れまれる。あなた方異邦人はそうだった。そうしたら、彼らだって今は不従順だ、それなら絶対憐れまれないはずがあるうか。結局、すべてのものが憐れまれるんだ。と言いまして、次の32節の命題が出てくる。

³² 神は凡ての人を憐まんために、凡ての人を不順の中に取籠め給いたり。

勝手な神様ではないかと私は言うわけです（笑）。神様はすべての人を憐れむために一端、不従順にしたと。

しかし、これは我々の人生に当てはめたらよくわかりますよ。子どもの時から「神様、神様」と、本当に神の子みたいな生活をしていのはまずいじゃないでしょ。まず反逆というのが出てきますね。自我にめざめます。特にクリスチャンホームは危ないですよ。小さい時から「神様、神様」と言っているでしょ。子どもたちが学校へ行きますね。やれ、

「バカ、ヤソ教徒、神なんかおるものか」

とか、からかわれるでしょ。そうしたら、子どもたちは傷つく。親を見てたら、あまり神の子らしくない姿で、親はちつとも神様の御意にかなわない生活をしている。

「じゃ、もうやめた」

なんて、そういうことが起こりうる。我々はみな一端、反逆するんです。

親子関係もそうです。生まれてからこのかた、お父さんお母さんとサヨナラするまでに、一度も逆らわないというような子どもはまずいはずですね。特に父親とはぶつかり合います。お母さんとはうまくいくんですよ。けれども、父親とは喧嘩しますね。何かしらないけれども。男の人でそういう体験はないですか。この頃の父親は、草食系のお父さんならぶつからないかもしれませんけれども、本来、親父というのは立ちはだかるもので、はねつけていくんですね。けとばしていく。それで鍛え上げていく。お母さんは「よしよし」といつてかばう。それが普通の家庭の姿だったんです。

私が言いたいのは、クリスチャンホームで育て、「よし、よし」で、あまりにも「信仰、信仰」で育った人はあぶない。いつかガツンと躓きがくる。躓くなら、早いうちに躓いておくほうがいい。あとになって躓きますと、それはとても回復がむずかしい。そういうことがありますから、やはり、子どもの教育というのは、普通に育てるのがいい。普通に世の中の荒波を経験して、そして、遠くから見守って、そして傷ついたら慰めてあげるとか、普通に育てあげて、徐々に徐々にそういう信仰が芽生えてくる。特に苦しみに出会った時に励ます。そんな時には暖かく受け入れる。そういう姿でありますと、子どもはやがて、

「ああ、親はああいうふうに自分を見ていてくれたんだ」



ということ、ちゃんとあるべき姿に戻ってくる。そのジグザグが普通の人間の姿ですの
でね。だから、このイスラエルも決して他人事ではない。

³² 神は凡ての人を憐まんために、凡ての人を不順の中に取籠め給いたり。

と。だから、子どもさんたちの教育で悩まれたら、これを思いだして、神様がやっている
んだ。神様がこの子どものことを思って、かたくなにしていらいしやるのだ。でも、帰っ
てくると。

アウグスチヌスというのは不良だったそうですね。お母さんのモニカが一生懸命に祈っ
たという話がありますでしょ。だいたい、不良だった人が今度は素晴らしい人間に変わる
ようなんですね。そういういろんなお話がありますが。

³² 神は凡ての人を憐まんために、凡ての人を不順の中に取籠め給いたり。

³³ ああ神の智慧と知識との富は深いかな、その審判は測り難く、その途は尋
ね難し。

もうパウロは自己陶醉の心境に達している。そして、

³⁴ 『たれか主の心を知りし、誰かその議士^{はかりびと}となりし。³⁵ たれか先ず主に与え
て其の報^{むくい}を受けんや』

という言葉を用いている。そして最後に、これはパウロ流ですよ、もう感きわまつて、

³⁶ これ凡ての物は神より出で、神によりて成り、神に帰すればなり、栄光と

こしえに神にあれ。アメン。

と。これは原文でいいますと、こんなに丁寧な言葉でなくて、言葉が並んでいるだけだ
ということ、ルター訳でいいますと、

「なぜなら、神によつて、神を通して、神にとすべての事物は定められている。

神に永遠に栄光あれ。アメン」

それを日本語訳では、

「凡ての物は神より出で、神によりて成り、神に帰すればなり、栄光とこしえ
に神にあれ。アメン」

と丁寧に訳してある。

●パウロの世界観

こうやって非常に駆け足で見えてきましたけれども、9章から11章はすごいところですね。
ローマ書の今までものと同じとこの部分だけ独立してますよ。パウロの心の祈り、それ
からパウロの世界観というか、民族観、イスラエルと異邦人との関係、それを神様の視点
からどうなっているかと、物凄い大きな捉え方を展開している。しかも、初めに言いまし
たように、普通の人なら躓いて然るべきところを、ぬけぬけとそれをずっと論証して突っ
走っている。最後は、異邦人であろうと、ユダヤ人であろうと、みんな不従順の中に一端



閉じ込めて、その不従順に気づいて「悪かった」という、それに対して憐れみをもってじつと待っておられる。

そして、気づいた者を全部救いたもう。それを全部やってくれたのがキリストなんです。だから、キリストというお方に出会って初めて、この9章から11章が納得できる。どんなに不条理なことがいろいろ出てきても、私は常に、

「キリストさま、あなたがいらつしやるから大丈夫です」

と。旧約聖書の中に出てくるいろんな、ちよつと我々からしたら受け入れがたい出来事もキリストが全部それを背負いこんでいらつしやる。旧約聖書に出てくるのが全部、永遠の真理だと絶対に見ては、私は間違いだと思う。神様の啓示というのは、民族のそれぞれの段階に応じて示される。戦国時代には戦国時代らしく、民族同士がいがみあっている時にはそれに相應しい形で啓示が与えられる。キリストはそれをはるか超えた次元で語っていらつしやる。だから、

「敵を殲滅^{せんめつ}しろ」

というのが旧約聖書だとしますと、キリストは

「敵を愛せよ。敵のために祈れ」

と、全然、次元が違います。だから、常に普遍妥当的に信頼できるのはキリストの御言です。旧約聖書は時代の制約を受けている。だから、

「旧約聖書と新約聖書は、同等のように、すべて神の御言として絶対だ」

なんて思うとえらい間違いを起こす。

私は、アメリカがいろんな爆撃をしたり、いろいろ戦争をやるのは、ちよつとそういう影響が出ているのではないかと思う。

「敵には報復を」

という旧約的な考え方で、自分のやっていることは聖戦である、正しい戦争であると。そしてことごとく失敗した。ベトナムもそうでしょ、アフガニスタン、イラン・イラク問題、すべて何か、そのアメリカというキリスト教国であって——大統領はみな聖書に手を置いて宣誓していうことで一応信仰というものを表に出して、またそういう人たちが指導者であるけれども——その世界観というのは何かしら旧約聖書的なものに囚われているのではないかという、私の勝手な邪推かも知れませんが。

ことごとく、それが裏目に出ていますよね。アメリカの経済が何であんなに衰退していくのか。戦争のためにものすごいお金を使っているからです。戦争のために使うお金はちつとも戻ってこない。他の投資ならば、それがまた生産という形で戻ってきます。富みが富みを産むわけですが、戦争で使うお金というのは全部消えていくわけです。物凄なお金を使って、軍費に投じている。それを今はどの民族もやりだしている。

そういうことを考えますと、人間というのは何と無駄なことにかくさんお金を使って、



自分で自分たちの生存を危うくしているかということを思わざるをえませんね。

「これはいつたい、神様、どうしてなんでしょうか？」

と聞きたいくらいなんですネ。

私は、「どの国がどうだ」ということは、相対的には言いますよ、近隣の変な国に日本は脅かされていますから、「わがうち穏やかならず」ですが。

「神様の次元から見ても、本当に正しい審判をなさってください。我々は御意に従います。どうぞ、わが国の指導者たちが本当にあなたの御前に平伏して、あなたにすがるようにしてください」

と。そういう思いが強いですね。だから、我々はやはり、為政者のためにも祈らないといけないと思う。

「為政者の心を開いてください。為政者を、権力争いではなくて、党派争いではなくて、本当に国のために世界のために身を捨てて働くような、そういう人をリーダーにしてください。そういう人たちが国を司^{つかさど}つていきますように」

という祈りをやはり我々はもたないといけないと思いますよ。

まあそんな、ちょっと派生的なことにまで話は及んでしまいましたけれども、この9章から11章という大変なところを皆さんと一緒に今日はお話させていただきました。

（月刊誌『致知』からの記事の紹介、プロ野球選手のイチロー（鈴木一郎）の少年時代の作文など以下省略）

